

P2-019

小児内科専門病院における一般外来での心理士の取り組み～子育て支援としての外来心理相談の役割～

横山 梨恵、石崎 優子、園府寺 美、木野 稔

¹社会医療法人真美会中野こども病院

【はじめに】

当院は小児内科専門病院であり、創立以来心身両面からの医療に取り組んでいる。当院では子どもの心や発達について悩みを抱える患児家族が、専門的治療(心理療法、心身症外来、など)の必要性も含めて気軽に心理士に相談できる場として『外来心理相談』という取り組みをH25年度から一般外来において開始した(1枠30分予約制、週15枠、心理士による相談と専門的治療の予約、医師の一般診察あり)。今回、外来心理相談に来院した患児の特性について分析を行ったので報告する。

【対象と方法】

対象はH27年4月1日～H28年3月31日の間に外来心理相談に来院した0～15歳の患児382人(平均年齢7.8歳：男児245人、女児137人)について、主訴内容による分類、心理士が取った対応について分類を行い、特性を分析した。

【結果】

外来心理相談を受診した382人の内、身体症状や不登校、不安行動など心理的背景が疑われる主訴の患児は206人(男児112人、女児94人)であった。それ以外の主訴を訴えた患児は176人(男児133人、女児43人)で、発達の遅れ、多動、不注意、コミュニケーション力の問題、こだわり、感覚過敏、など発達の問題が疑われる主訴が殆どを占めていた。心理的主訴を訴える患児は年齢が上がるごとに増加傾向にあった。心理的主訴のある患児の内、外来心理相談にて心理士の助言のみで経過観察となった患児は42%であり、専門的治療の予約を取らずに対応していた。

【考察】

心理的問題が背景の場合、必要に応じて心理療法(自費)や心身症外来などの専門的治療が必要となるが、その一方で約4割の患児が外来心理相談における心理士の助言のみで対応することができていた。専門的治療の予約は待ち期間が数か月生じることも多く、問題が生じた早期の段階での介入は難しい場合が多い。しかし、外来心理相談は枠が多いため待ち期間が生じることが少なく、問題が生じた比較的早期の段階での介入が可能となっている。渦中にある家族の不安の傾聴や、初期対応の助言が安心につながったと推測される。また、一般外来で相談が可能のため、診療で心因が疑われる患児で、専門的治療に対して抵抗感が強い場合にも相談勧奨がしやすいと考える。

【まとめ】

外来心理相談の取り組みにより、一般外来の中で心理士が助言を行い患児家族の不安を軽減するといった育児支援の役割を担うことが可能となった。

P2-020

乳幼児の母親の育児に対する自信および主観的虐待感と各種相談相手の有無との関連—健やか親子21 最終評価の全国調査より—

山崎 さやか¹、篠原 亮次²、秋山 有佳³、
山縣 然太郎³¹健康科学大学 看護学部看護学科、²健康科学大学 健康科学部理学療法学科、³山梨大学 社会医学講座

【目的】

母親へのサポートは、相談のような情緒的サポートと、具体的な手助けをする手段的サポートに分類される。その中で、育児の相談相手は母親の情緒的サポートを担っており、育児中の母親の重要な支援環境の1つである。そこで本研究では、乳幼児を持つ母親の育児に対する自信および主観的虐待感と、育児の各種相談相手の有無との関連を検討する。

【方法】

対象は「健やか親子21」最終評価実施対象となった全国472市区町村において、平成25年4月から8月の間に3,4か月健診(3-4m、以下同様)、1歳6か月健診(1-6y、以下同様)、3歳児健診(3y、以下同様)を受診した児の保護者75,622名である。調査方法は、各市区町村から自記式質問票による調査を保護者に依頼、健診時に回収し分析を行った。目的変数は、母親の育児に対する自信のなさ、および主観的虐待感の2項目を用い、説明変数には育児の各種相談相手の有無を用いて単変量ロジスティック回帰分析を行った。また、児の性別、出生順位、出産時の母親の年齢で調整した多重ロジスティック回帰分析を行った。

【結果】

目的変数の育児に自信のない母親の割合は、3-4m：67%、1-6y：68%、3y：70%であった。また主観的虐待感では、3-4m：12%、1-6y：22%、3y：34%であった。多重ロジスティック回帰分析の結果、児の全年齢において母親の育児の自信および主観的虐待感と有意な関連が見られた相談相手の対象項目は、「夫」、「祖母または祖父」、「インターネット」であった。児の全年齢別のオッズ比(OR)の範囲は、「夫」(なし群：OR：1.20～1.51)、「祖母または祖父」(なし群：OR：1.20～1.39)、「インターネット」(なし群：OR：0.70～0.88)であり、相談相手が「夫」や「祖母または祖父」がなし群の場合、自信のなさ、および主観的虐待感をもつリスクが高くなり、一方、「インターネット」では、なし群でリスクが低くなる傾向がみられた。

【考察】

相談相手に夫や祖母または祖父が該当しない母親の場合、育児に対する自信のなさ、および主観的虐待感が高くなり、インターネットが該当しない場合は低くなる傾向が示唆された。家族のサポートは、保護者の育児不安感を低減させる先行研究の結果と一致した。一方、インターネットによるサポートに関する研究報告はまだ少ない。近年のSNSの普及を考慮するとインターネット利用と母親の自信および主観的虐待感の関係をさらに検討する必要がある。